

五四 鄙諺に曰く、「鹿を逐ひて走るものは、山を見ず」と。夫れ前面に求むる所の物あれば、則ち惟物をのみこれ求めて曾て其の險を憚らず。これを君子の道に譬ふれば、出づべきときは則ち出で、処るべきときは則ち処り、生くべきときは則ち生き、死すべきときは則ち死す。終日惟義をのみこれ見て、曾て得喪榮辱の以つて我が心を忒とするなし。乃ち彼の刀鋸鼎鑊の禍に至りても、亦問はず。其の光明俊偉、如何ぞ言ふべけん。蓋し其の力を得るゆゑんものは他なし、惟当初義を見ることの親切透徹にあるのみ。

鄙諺曰、逐鹿而走者、不見山、夫前面有所求之物、則惟物之求、而曾不憚其險。譬之君子之道、可出則出、可處則處、可生則生、可死則死、終日惟義之見、而曾無得喪榮辱以忒我心、乃至彼刀鋸鼎鑊之禍、而亦不問其光明俊偉、如何可言、蓋其所以得力者無他、惟在當初見義親切透徹而已。

【訳】ことわざに言う、「鹿を追っているものは、山を見ていない」と。これは前に追い求めるものがあれば、その物だけを求めて、危険があろうとも気にしないということだ。これを君子の道に譬えれば、世に出るときには世に出て、留まるときには留まり、生きるべき時には生き、死すべき時には死ぬ。ただいつでも「義」だけを見て日を過ごし、成功や失敗、名誉や恥辱によつて心を変えるようなことは一度もないのだ。足切り釜ゆでの刑を受けるに至つても、問題にしない。栄光や権勢を得ることについても、言うまでもないことだ。こうした力を得る源はただ一つで、他にはない。それは初めに「義」を見るところという姿勢を明確にし心の底まで徹底することだ。

五五 兀坐静黙の中、偶自ら思念するに、此の念苛くも正しければ、則ち此の兀坐は、便ち是れ聖賢の矩矱なり。此の念苟くも妄なれば、則ち此の兀坐は、便ち是れ禽獸の跬伏なり。必ずしも事に應じ物に接するを待ちて、然る後痕跡呈露せざるなり。而して此の兀坐静黙の中に、人禽の分已に判然たり。体念此に至りて、心骨為に寒し。

兀坐坐静黙之中、偶自思念、此念苟正、則此兀坐者、便是聖賢的矩矱、此念苟妄、則此兀坐者、便是禽獸的跬伏、不必待事接物、然後痕迹呈露也、而此兀坐静黙之中、人禽之分已判然矣、體念至此、心骨爲寒、

【訳】静かに黙して兀坐（じつと動かずに坐る）している時に、いろんな思いが出てくる。この思いがもしも正しければ、この兀坐は聖賢にかなったやり方であ

る。この考えがもしも理にかなっていなければ、この兀坐の中に猷のりものなどがいるのと同じだ。だから、必ずしも事件や物事にであってから、その人柄が出てくるものではない。この静かに兀坐している時に、人間らしいか獣のようなものであるかがはつきりとするのだ。ここまで考えてくると、心身を寒からしめるものがある。

五六 余よ、少年より志なきにあらざるなり。而るに工夫、專且つ切ならず。往往きききにして間事かんじに妨奪ぼうだつせられて、以つて今日に至る。悠悠ゆうゆう浮沈ふちん、終ついに聞きこゆる所なし。これを思えば爽然そうぜんとして覺えず自失す。

余自少年非無志也、而工夫不專且切、往往爲間事妨奪、以至今日、悠悠浮沉、終無所聞、思之爽然、不覺自失、

【訳】 私は、少年のころより学問の道に進むという志がなかったわけではない。しかしながら、そのための努力はその道一筋ではなかった。しばしば日常のつまらないことに追われてしまい、今日になってしまっている。時勢に押し流されて、だからだと日々を送り、ついに人に認められるということもない。このことを考えるとぼうぜんとして、思わず自分を見失ってしまう

五七 試みに思ふ。男児の生まるるや、父母これを喜び、親戚これを賀し、福慶ふくけい稱しょう 爵しやく以つて成すあるを祝ひ、桑孤蓬矢そうこほうし以つて事功を期す。其の我れに望む所のもの、固より浅浅ならざるなり。而るに今日、我の樹立する所は、曾て以つて父母親戚の意に副そふべきものありや否や。詩に云はずや、「蓼蓼りくりくなるは莪が、莪がに匪あず伊れ蔚い」と。真に是れ十分なる負愧ふきにして、十分なる罪過なり。

試思、男兒之生也、父母喜之、親戚賀之、福慶稱爵以祝有成、桑孤蓬矢以期事功、其所望於我者、固不淺々也、而今日我之所樹立、曾有可以副父母親戚之意者否、詩不云乎、蓼々者莪、匪莪伊蔚、真是十分負愧、十分罪過、

【訳】 ふと思う。男の子が生まれると父母は喜び、親戚はこれを祝い盃をあげる。男の子の成長を祝って、桑の木の弓とよもぎの矢を用いて天地四方を射て、将来世の中で飛躍することを期待した。そうであるのに、今日私の学問してきたことは、父母親戚の期待に添うものであったかどうか。詩経でも言っている「生い茂る莪が(つ)のよもぎ＝若葉を食用とする)のようになれと育ててくれたのに、育ったのは、莪がでなくて蔚い(おとこよもぎ)の役に立たぬものであった」と。まこ

とに、このことは自ら恥ずべきであり、罪である。

五八 天下古今、其の人、幾千億万なるを知らず。而るに聖賢豪傑は、
塵塵指を屈するがごとし。乃ち知る、天の、才を生ずるゆゑんのもの甚だ
齎しよくにして、而して人の自ら成すゆゑんのものも亦甚だ難し。

天下古今、其人不知幾千億萬也、而聖賢豪傑塵塵屈指、乃知天之所以生
才者甚齎、而人之所以自成者亦甚難、

【訳】世の中の昔から今まで、その人々は幾千億万であるかわからないぐらい多
い。しかし、聖賢豪傑と言える人はわずかに指で数えるくらいしかない。とい
うことは、天から与えられた才能を持つ者は非常に少なく、また人が自分で努力
して成しえるというのもまた非常に難しいということだ。

五九 古人の学問は、皆自己身分上より試み験し過ぐ。是の故に其の言、
皆平易切実にして、甚だしくは悦ぶべきものなきがごとし。既にして反覆
咀嚼すれば、始めて其の味の深く、而して工夫の、企及すべからざるを覚
ゆ。

古人之學問、皆從自己身分上試驗過、是故其言皆平易切實、如無可甚悦者
、即而反覆咀嚼、始覺其味之深、而工夫之不可企及矣、

【訳】昔の人の学問は、みんな自分自身のことから考え確かめている。だからそ
の言葉はとても平易で、新しく喜ぶものがないようにも感じられる。しかし、よ
くかみしめて深く味わうと、初めてその言っていることの深さがわかり、こちら
の身に響いてくるものがある。そして、努力してもなかなか追いつくことのでき
ないことがわかってくる。

六〇 我が邦俗、古の士人ややもすればすなはち律義の二字を拳ぐ。而る
に今人は則ち容易に看過して、これを田翁野夫でんおうやふに付して省みざるなり。蓋
し律は是れ常法、義は是れ権法。律は則ち以つて身を修むべく、義は則ち
以つて変に応ずべし。身を修め変に応ずれば、聖賢君子の事畢る。此の上
頭更に何事か理會すべきものあらん。

我邦俗、古之士人動輒舉律義二字、而今人則容易看過、付之田翁野夫而不省

也、蓋律是常法、義是權法、律則可_レ以修_レ身、義則可_レ以應_レ變、修身應_レ變、聖賢君子之事畢矣、此上頭更有_レ何事可_レ理會

【訳】我が国一般では、昔の教養や地位のある人たちは、おおよそ事あるごとに律義への二文字を大切にした。しかし今の人たちは、そのことを容易に見過ごして律義を田舎親父のものとして省みない。まさに律はいつでも誰でも守らなければならぬ決まりのこと、常法のこと。義は臨機応変に処置する法、権法のこと。律はしたがって身を修め自分の行いを正しくすること、義その場に応じて適切に処置することである。身を修め、変化によく対応できれば聖人、賢人、君主のやらなければならぬことやり終えたということだ。これ以上更に何事も理解しなければならぬことはない。

六一 志_一たび奮_レ拔_レすれば、則ち万_レ累_レ皆_レ脱_レしてこの身の軽く且つ安きを覚ゆるなり。志_一たび消_レ蝕_レすれば、則ち百_レ病_レ盡_レく現_レわれてこの身の煩_レわしく且つ悩_レましきを覚ゆるなり。

志一奮拔、則萬累皆脱、而覺此身之輕且安也、志一消蝕、則百病盡現、而覺此身之煩且悩也

【訳】人は志を立てて奮い立てば、全ての煩わしさから抜け出して、身は心軽く安らかに感じる。ところがいったん志がむしばみ消えてしまったなら、いろいろな病気がでて、我身を心配し深い悩みに襲われるものなのだ。

62 (2016/02/6)

六二 易_一を讀_レみて以_レつて其の深_レ奥_レを採_レり、小学_一を讀_レみて以_レつて其の規_レ矩_レを守_レり、史_一を讀_レみて以_レつて其の世_レ故_レを考_レえ、而して傍_一、唐宋_一八家_一の文_一を讀_レみて以_レつて其の步_レ趨_レ馳_レ騁_レを習_レう。其れ然_レり而して後_一に以_レつて徳_レを養_レふべく、以_レつて身_一を修_レむべく、以_レつて変_レを制_レすべく、而して又_一以_レつて文字_一に託_レしてこれを永世_一に伝_レうべし。此れぞ是れ今日の吾_一が門_一の授業_一の次第_一なり。汝_一が輩_一宜_レしく此の意_一を知_レ道_レすべし。(六一)

讀_レ易_一以_レ探_レ其_レ深_レ奥_一、讀_レ小_レ學_一以_レ守_レ其_レ規_レ矩_一、讀_レ史_一以_レ考_レ其_レ世_レ故_一、而_レ傍_レ讀_レ唐_レ宋_レ八_レ家_一之_レ文_一、以_レ習_レ其_レ步_レ趨_レ馳_レ騁_一也、其_レ然_レ而_レ後_一可_レ以_レ養_レ徳_一、可_レ以_レ修_レ身_一、可_レ以_レ制_レ變_一、而_レ又_一可_レ以_レ託_レ文字_一、傳_レ之_レ永_レ世_一矣、此_レ是_レ今_レ日_一吾_一門_一授業_一之_レ次_レ第_一、汝_一輩_一宜_レ知_レ道_レ此_レ意_一

【訳】「易経」を読んで、その奥深いところを探究し、「小学」という宋の道徳書を読んで、人の道やきまりを知り守り、歴史書を読んで、世の中のことに就いて考え、またその一方では唐宋時代の八人の文章家の文を読んで、その文字の使い方や文体を習う。そうすることによつて、徳を養い、身を修め、よくない行い言動を抑え、そしてまた、それらのことを文字で書き記して、後の世に残していくのだ。これが、今日、私の塾でやつている内容である。諸君も、このことをよく知っておいてほしい。

六三 教えて其の方を得ざるは、是れ教えるものの罪なり。学びて其の力を得ざるは、是れ学ぶものの過なり。教学道なく、群居游談し、畜むべきの精神を糜し、得難きの光陰を費し、以つて誤ちを一生に擔うは、是れ我と汝と、均しく其の責あり。相共に惕励警戒せざるべからざるなり。(六三)

教而不_レ得_レ其方、是教者之罪、學而不_レ得_レ其力、是學者之過、教學無_レ道、群居游談、糜_レ可_レ畜_レ之精神、費_レ難_レ得_レ之光陰、以_レ擔_レ誤_レ一生者、是我之與_レ汝、均有_レ其責、不可_レ不_レ相共惕勵警戒_レ也。

【訳】教えても、教えたことが理解されずにいるのは、教えるものの責任である。いくら学んでも、その力が身につかないのは、学ぶものの責任である。教えることと学ぶことがいいかげんで、ただ大勢が集まつておしゃべりをしていては、大事にしなければならぬ精神を粗末にし、貴重な時間をむだに過ごすことになり、それによる過ちを一生負つていかなければならないことになる。これは私と諸君とに、お互いに責任のあることである。共に、慎み気をつけていかなければならないことだ。

六四 凡そ経はこれを誦するのみならば、亦何の難きことかこれ有らん。蓋し経を治むることの難きは、善く其の意を会してこれを身に体するにあり。古人の孜孜矻矻として、斃れて後止むゆゑなり。

凡經誦之而已、亦何難之有、蓋治經之難、在善會其意、而體之身、古人之所
以孜孜矻矻斃而後止_レ也

【訳】単に経(四書五経など)をそらんじることだけなら、決して難しいことではない。しかし、経を習得することの難しさはその意図(意味)を理解して、自分のものにするところにある。古人(曾子)が言っているように、怠らずこつこつとたゆまぬ努力を続けていって、死ぬときにやっと終わるといふようなものだ。

六五 夫れ人出でざれば則ち已む。出づれば則ち必ず其の用あることを要す。苟くも出でて用を致す所なくんば、則ち出でざるの愈れりと為すに如かざるなり。

夫人不_レ出則已、出則必要_二其用_一、苟出而無_レ所致用、則不_レ如_レ不_レ出之爲愈也、

【訳】人たるもの、世の中に出なければそこで終わる。世の中に出れば、必ず大事な仕事をしなければならぬ。世の中に出て人の役に立つことがなければ、世の中に出ない方がまだましだと言わざるを得ない。

六六 凡そ学は深く造らんと欲すれば、則ち必ず先ず其の身を立つるに本末あるを要す。苟くも身を立つるに本末なくんば、則ち胡乱顛倒し、事に次序なし。平生読む所の書多しといえども、悉く皆自ら朦朧昏花の中に過ぎて、事に臨むに至るに及びては、曾て毫髪も力を得るなし。此れぞ是れ今日の学人の通病、痛懲せざるべからざるなり。

凡學欲_二深造_一、則必先要_二其立身之有_一本末、苟立身無_レ本末、則胡乱顛倒、事無_レ次序、平生所_レ讀之書雖多、悉皆自_レ朦朧昏花中過、而及_二至臨事_一、曾無_レ毫髮得_レ力、此是今日學人之通病、不_レ可_レ不_レ痛懲_一也、

【訳】そもそも学問を、深く自分のものにしようとするならば、まず、身を立てる（自分が修養して一人前になる）のに、重要なものと、そうでないものをはっきりさせる必要がある。もしも、身を立てるができていなかったら、なにをやっているのかわからなくなり、混乱するばかりだ。ふだん多くの本を読んで学問しているといっても、それはぼんやりした中で目の前の斑点を追っているぐらいのこと、いざ事が起こっても、少しも役に立たない。こういうことが、今日の学問する人の陥りやすい弊害であり、深く戒めていかなければならないことだ。

六七 盛夏炎暑、日光炙くがごときとき、打坐時を移し、満身汗流る。此の間宜しく些かの辛苦を喫し以つて進取を図るべし。古人云はずや、「冬、炉せず、夏、扇せず、坐すに茵を設けず、行くに蓋を張らず」と。

盛夏炎暑日光如_レ炙、打坐移時、満身汗流、此間宜_レ喫_二些辛苦_一以_レ圖_二進取_一、古人不_レ云乎、冬不_レ爐、夏不_レ扇、坐不_レ設茵、行不_レ張蓋、

【訳】真夏、大変暑く日光が焼け付くように照っているとき、静座を長い時間し

ていると、体中に汗が吹き出てくる。このようにしばらくの間、苦しさを味わうことによつてやる気を高めることができる。昔の人も言っているではないか。

「冬には囲炉裏をせず（暖房をせず）、夏には扇を使わず（冷房をせず）、座るのに敷き物を使わず、外に出ても傘など使わず」と。

六八 夫れ種樹の道、其の根は深からんことを欲し、其の培は厚からんことを欲し、其の灌溉は時ならんことを欲し、而して其の長ずるを待つや、殆ど猶おこれを忘るるがごとくならんことを欲す。凡そ学の道も亦當にかくのごとくなるべし。

夫種樹之道、其根欲深、其培欲厚、其灌溉欲時、而其待長也、欲殆猶忘之、學之道、亦當如此、

【訳】樹木を植えるには、「種樹」の道理がある。根は深く植えるのがよいし、土をかぶせるのは厚くがよいし、水をやるのは適当な時期がよいし、そして、その成長を待つのは、気長にこれを忘れてしまいうぐらいがよい。学問の道理も、このよなものでなければならぬ。

六九 吾人の書を読む、其の志は本名のためにはあらざるなり。利のためにあらざるなり。傍人の勸説に由るにあらざるなり。一時の意興に属するにあらざるなり。則ち是れ豈にいわゆる植根の深きにあらざるや。

吾人讀書、其志本非爲名也、非爲利也、非由傍人勸説也、非屬一時意興一也、則是豈非所謂植根之深乎、

【訳】私が読書をするそのねらいは、名を上げるためではない。もうけのためにするでもない。周りの人の進めによるものでもない。一時の興味によるものでもない。すなわち、これこそ樹木を育てるのに根を深くしていくようなものではないか。